

初等教員養成課程の音楽指導法をめぐる実践的考察

— アクティブ・ラーニングによる身体表現活動に焦点を当てて —

飯村 諭 吉*, 時得 紀子**

(平成28年6月8日受付, 平成28年12月6日受理)

A Practical Study of Music Teaching Method in Elementary School Teacher Training Course : Focusing on the Physical Expression Activities by Active Learning

IIMURA Yukichi *, TOKIE Noriko **

This case study deals with the elementary school teacher training curriculum followed at the elementary school music department in A University of Education. The study also reveals the grasp of the students towards body expression activities. This research is an attempted analysis using text mining of a reaction paper submitted by one of the students of the aforementioned "Music Methods for Elementary School" class. As a result of that, it has become clear that the various activities using Active Learning in the student contributed not only to music experience via a learning experience. At the same time, it also was positioned as one of the means to prompt the cooperation between subjects.

Key Words : Teacher training course, Music education, Active Learning, Eurhythmics, Text Mining

1. はじめに

平成26年11月, 中央教育審議会は文部科学大臣から「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」⁽¹⁾ 諮問がなされ, 新たな学習・指導方法として学習者の能動的な学習活動を意味するアクティブ・ラーニング (Active learning) を推進する方向性が定められた。

こうしたアクティブ・ラーニングへの注目は教員養成系大学にも広がっており, さまざまな試みがなされているが, 成功事例は必ずしも多いとはいえない状況にある。これまでの事例をみると, 田中 (2016)⁽²⁾ は, 教員養成課程に在籍する学生を対象とした講義において, 教育政策をテーマとしたディベート学習や課題解決型のグループ活動を行い, こうした実践を取り入れることによって, 学生自身は仲間と協力しあう力, さまざまな角度から物事を思考する力, 物事を疑うことを前提に考える力を培うことについて手応えを感じさせていたと報告していた。また, 山崎ら (2015)⁽³⁾ は, 教員養成カリキュラムに組み込まれている教育実習は, 大学での学習をはじめ, 子どもの反応や理解度を実践と結び付け, 実践から学ぶ主体的・能動的学習が展開されることから, 教育実習の中でアクティブ・ラーニングが行われていると示唆していた。さらに, 大学の講義の中でさまざまなアクティブ・ラー

ニングを経験し, 模擬授業で試すことが重要であると述べていたことから, 今日においては教員養成カリキュラムを支える効果的な指導方法の開発が強く求められると考えられる。

このように, 大学生を対象としたアクティブ・ラーニングによる講義は, 既述のような事例が挙げられるものの, 谷村 (2015)⁽⁴⁾ が指摘するように, 失敗事例の蓄積, 類型化が試みられている段階である。そのため, 亀倉 (2015)⁽⁵⁾ のように, アクティブ・ラーニングの失敗事例から検討を行うことについても, 視野に入れることが必要となる。

次に, 本稿の調査対象となる初等教員養成課程を対象とした音楽指導法の先行研究として, 安藤 (2014)⁽⁶⁾ は, 教員養成課程を対象とした模擬授業の実施において, 小学校低学年の学習活動のうち, 歌唱だけでなくリズム楽器や身体で表現しながら, 音楽づくりへ発展させる傾向が多いことを示しており, 谷本 (2013)⁽⁷⁾ は, 体育系学生を対象とした実践事例の検討を通して, 主専攻が音楽以外の学生にとって有効な, 教科科目と教職科目を関連づけたカリキュラムデザインの構築の重要性を指摘しているなど, 音楽を主専攻としない学生にとっても比較的容易に取り組むことが可能となる講義内容の検討が大き

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科学生 (Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education)

** 上越教育大学 (Joetsu University of Education)

な課題として浮上している。

このような実情の中、筆者らは新潟県内のA教育大学で開講されている初等教員養成の必修科目「初等音楽科指導法」において、身体の諸感覚を総動員させながら心身の調和を図るリトミック (Rythmique) をはじめとした身体表現活動^(注1)を長年継続してきた。そこで本稿は、受講生に身体表現活動を取り入れたアクティブ・ラーニングを経験させることは有効ではないかと考え、本事例の学習成果を検討することを目的とした。また、筆者らのこれまでの研究成果⁽⁸⁾を踏まえ、この授業の毎回の終了直前に記述するリアクションペーパーの文章データから相関関係や法則性を見出すことを目的とした、テキストマイニング (Text Mining) による分析を試み、受講生全員の回答の傾向を考察することを目指した。

2. A教育大学「初等音楽科指導法」の取組

小学校教諭免許状の取得に関わる学部3年生および教員免許取得プログラム (3年間で小学校教諭免許状を取得予定) に在籍する大学院生を対象とした「初等音楽科指導法」は、教育職員免許法施行規則第六条第四欄「教育課程及び指導法に関する科目」として設置された必修科目である。また、本講義の履修状況としては、受講生236名のうち9割以上が芸術系分野以外を専門とする学生であり、音楽の経験や能力に個人差が生じている実情がある。ただし、この科目を履修する以前に受講生は、教育職員免許法施行規則に定める「教科に関する科目」として設置された基礎科目「音楽」を履修済もしくは履修中であるため、ピアノや歌唱といった音楽科教育を実践する技能を習得している段階であるとともに、楽典を中心とした音楽に関する基礎的知識を有している。

この取組では、小学校音楽科の学習理論と具体的な授業実践との事例検討を中心としており、「小学校音楽科における教科の目標、指導内容、指導計画、指導展開、及び評価の方法等について理解を深め、学習指導案作成と授業を実践できる力を身に付ける」⁽⁹⁾ことを目的としている。そして、本取組実施のための一つの基準となる「A教育大学スタンダード」⁽¹⁰⁾(図1)においては、Ⅲ-1「子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる」、Ⅳ-1「教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項 (教科等の知識や技能) を身に付けている」に該当している。

本講義においては、現行の小学校学習指導要領 (音楽科)⁽¹¹⁾における音楽づくりの領域から、実際の授業場面を想定した指導方法の実践例が学べるよう、身体表現活動を中心としたグループ活動を展開していった。本節冒頭でも述べたように、本稿で事例とするA教育大学の「初等音楽科指導法」の受講生の9割以上は音楽を主専攻としない学生であることから、各々の音楽に関する知識や経験

に個人差が生じている。また前年度のリアクションペーパーの回答を見ると、教育実習で行う音楽指導に苦手意識をもつ学生が多いことが示唆された。こうした実情から、音楽理論の知識やピアノやリコーダーの技能を要さず、学生自身が主体的に取り組むことが可能となる身体表現活動を重視し、実践を継続してきた。

事項	Ⅰ. 教員として求められる使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項	Ⅱ. 教員として求められる社会性や対人関係能力に関する事項	Ⅲ. 教員として求められる幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項	Ⅳ. 教員として求められる教科等の指導力に関する事項
到達目標	1 教育に対する使命感や情熱を持ち、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身に付いている。	1 教員としての職責や義務の自覚に基づき、目的や状況に応じた適切な言動をとることができる。	1 子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができる。	1 教科書の内容を理解しているなど、学習指導の基本的事項 (教科等の知識や技能) を身に付けている。
	2 高い倫理観と規範意識、困難に立ち向かう強い意志を持ち、自己の職責を果たすことができる。	2 組織の一員としての自覚を持ち、他の教職員と協力して職務を遂行することができる。	2 子どもの発達や心身の状況に応じて、抱える課題を理解し、適切な指導を行うことができる。	2 板書、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身に付けている。
	3 子どもの成長や安全、健康を第一に考え、適切に行動することができる。	3 保護者や地域の関係者と良好な人間関係を築くことができる。	3 子どもとの間に信頼関係を築き、学級集団を把握して、規律ある学級経営を行うことができる。	3 子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができる。
	4 反省的実践を営む基本的な姿勢を身に付けている。	4 地域社会の一員として、地域や学校の各種行事やボランティア等に参加し、その責務を果たすことができる。	4 子どもの実態や学校の教育課題を踏まえて、結果や成果を意識しながら学級経営の評価を行うことができる。	4 全体計画及び年間指導計画の作成に当たっては、学校における全教育活動との関連の下に、教育活動を創造し、展開するための基本的事項を身に付けている。

図1 「A教育大学スタンダード」の類型

3. 身体表現活動を重視した具体的プログラム

1) 音楽あそびの諸活動を取り入れた実践事例

本実践における音楽あそびとは、身体表現が伴った音楽的活動のことである。中でも、①スイスの作曲家エミール・ジャック・ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze) が提唱したリトミックの教育法に立ち返り、これを咀嚼した諸活動、②イギリスの作曲家、トレヴァー・ウィシャート (Trevor Wishart) によって創出された「音あそび」、を軸にした活動を取り入れた (表1)。こういった活動について、板野 (1990)⁽¹²⁾はダルクローズの論を、「多くの者は生まれつきリズム感覚を持っているが、表現の能力は欠けている」と解釈しており、坪能 (1987)⁽¹³⁾はウィシャートの論について、「音楽ゲームは子どもたちのアイデアを開発し、イマジネーションを広げるための一つ」であると述べている。このことから、「音あそび」は子ども自身が持つ音のイメージを具現化したり、相互交流によって新たな発想を生み出すなど、創造性の涵養を促す学習の機会とすることが期待されるであろう。

一方、アクティブ・ラーニングに視点を移すと、永田ら (2016)⁽¹⁴⁾がその技法として協調学習を挙げるように、かねてから個人よりも小集団で学び、他者との相互作用

により学習が深まることが重視されてきている。しかし本講義は、こうした風潮が広がる以前から、小集団による学習形態を継続してきた。そこで本実践においても、グループ活動による身体表現活動を展開し、受講生がアクティブ・ラーニングを機能させる学習形態を学び取れるように心掛けた。

加えて、厚生労働省（2013）「グループワーク運営の留意点と実施方法」⁽¹⁵⁾におけるグループワークファシリテーションの意義と実践を念頭に置きながら、より濃密なグループ活動を目指した。その例として、自由に意見を交換することができる時間を十分に確保する他に、受講生同士のグループ活動を支えるティーチング・アシスタントを採用し、各学生の意見や発想を引き出すことを目的とした。その後、授業者がグループ活動その成果や問題点について答える機会を設けた。ここでは、各グループの協調的な省察を促すことによって、新たな気付きを見出すとともに、各自が相互補完的な関係の中で意見交換できるよう配慮した。

2) プロのダンサーを招いた実践事例

小学校音楽科で扱われるべき身体表現活動とは、音楽あそびにとどまらず、小学校体育科で必修とされるダンスを含むものとして捉えている。その背景には、現行の小学校音楽科教科書の「おどるこねこ」⁽¹⁶⁾や「ピンクパ

ンサーのテーマ」⁽¹⁷⁾のように、西洋クラシックはもとより、ジャズやポップスといったさまざまな音楽ジャンルを楽曲に合わせて身体表現を行う活動が掲載されていることが挙げられる。このことから、異なる音楽ジャンルによるリズムによって身体表現を使い分けるダンスのテクニックを体験し、さまざまな表現方法を体得することが強く求められるであろう。

そこで、本実践では試行的な取組として、ニューヨーク在住のダンサー・振付家である中澤利彦氏を招いて、「ダンサーとして生きる ー夢に向かって走り続けるー」と題したワークショップを行った。なお、このようなゲストティーチャーを招いた実践について、高橋（2015）はアクティブ・ラーニングの視点から専門家を呼ぶ、外部から学ぶことを推奨している⁽¹⁸⁾。こうした見地から、身体表現の専門家であるプロのダンサーを招き、さまざまな音楽ジャンルによるダンスの指導を受け、多様な表現方法について理解を深めることは、これから身体表現活動を教育現場で実践する受講生にとって意義のあるものと考えられる。

ここでは、これまでの研究で示した新潟県内のA教育大学附属小学校の実践⁽¹⁹⁾と同様、ニューヨーク・アポロ劇場で行われたアマチュア・ナイトでのエピソードを始めとした、プロ・ダンサーとして成功を収めるまでのキャリアについて振り返る内容であった。そして、講演会の

表1 身体表現を取り入れた活動事例一覧

①「リトミック」を導入した活動事例(太字下線は筆者)

項目	活動名	概要	展開例
1	フェイス・カノン	顔の部位を両手で指しながら、 3拍 遅れで、リーダーの模倣をしていきます。	「目、口、口」、「鼻、鼻、耳」など、3カ所ずつを 3拍 に入れて、動作と同時に口でも顔の部位を言います。
2	ボディ・カノン	体の部位を両手で指しながら、 3拍 遅れで、リーダーの模倣をしていきます。	「頭、肩、肩」、「膝、腰、腰」など、3カ所ずつを 3拍 に入れて、動作と同時に口でも顔の部位を言います。

②「音あそび」を導入した活動事例(太字下線は筆者)

項目	活動名	概要	展開例
1	ハロー・ゲーム	リーダーに合わせて一斉に、手拍子を 3拍 、膝上でも 3拍 のリズム動作を繰り返します。膝上の 3拍 の間に、さまざまなことばを組み込んで、ノンストップで繋げていきます。	自分の名前(たろう、はなこ)、好物の食べ物、行ってみたい場所
2	手拍子まわし	手拍子を輪の中の順に出来る限り 速く 、ドミノ倒しのようにまわすゲームです。	右方向に手拍子をまわす一方で、左まわりには足でトンと床を付く動作を組み込むなど、異なる動作を時間差で逆方向に伝えていきます。
3	音のパーキング	時間空間の中に、グループメンバーの空気を読みながら、短く、鋭い手拍子を 即座に埋め込んで 行きます。しかし、同時に他の誰かも全く同じタイミングで手を叩いたならば、ダブル・パーキングで「アウト!」。両者(あるいは三者)ともその場に座り、ゲームから脱落です。	手拍子の代わりに「声」でもチャレンジしてみましょう。
4	指揮者ゲーム	各自がいろいろな音色(高い音 、 低い声 、 太い声 、 細い声)を担当し、 自分らしい特色がある声 で、指揮者のアドリブによる指揮に従って即興で創作していきます。	声によるアンサンブル(ヴォイス・アンサンブル)以外にも、体の各部位を楽器に見立てた、ボディーインストゥルメントなどでも可能です。

後半ではSEKAI NO OWARIによる楽曲“Dragon Night”を中澤氏の振り付けによって踊った^(注2)。

さらに翌週の講義では、A教育大学附属小学校の実践をビデオで鑑賞し、教師を目指す視点から身体表現活動全般に対して捉え直した。ここでは、中澤氏の「ダンスに正解はないから楽しい」「何でも挑戦することが大事」という言葉に触発されて、児童が前向きにダンスに取り組む姿が放映されており、身体表現活動そのものに対する見方やその位置づけを検討する契機となっていた。その後、これまで行ってきた活動が児童の音楽的発達にどのように貢献するのか、小学校音楽科における表現活動はどのように在るべきかについて、各自の関心を深めながら、本活動全体をまとめた。

4. 本調査の方法

1) 調査対象者

「初等音楽科指導法」の受講生（学校教育学部 176 名、学校教育研究科 60 名）が記入した自由記述のリアクションペーパーの回答を対象とした。

2) 実施時期

本調査では、2015年4月上旬から7月下旬に4回開講された「初等音楽科指導法」の講義を対象としている。このうち、2015年4月に行った①音楽あそびの諸活動を取り入れた実践事例、同年6月に実施した②プロのダンサーを招いた実践事例、③「A教育大学附属小学校」実践の鑑賞を行った実践事例を取り上げ、事例授業終了前に配布するリアクションペーパーには、本講義で学んだこと、考えたことを自由に記述するよう説明し、各講義後に回収を行った。

3) 分析方法

リアクションペーパーの自由記述の回答（n=236）から抽出された言語データを定量的に分析するため、樋口（2004）⁽²⁰⁾が開発したKH Coderを用いて、テキストマイニングによる分析を行う。その理由は、自由記述によるリアクションペーパーの情報量は膨大であり、文章全体の要約を行うことにはかなりの時間を要すること、また大量の文章データの分析を複数の分担者によって行うと、解釈が恣意的になることが想定されるからである。

これまで、自由記述の回答をテキストマイニングによる分析を行った事例は多く見られ、北村（2016）⁽²¹⁾のシラバスにおける授業目的と成績評価方法の変化の研究や、越中ら（2015）⁽²²⁾による授業評価アンケートの研究などによって成果が報告されている。しかし、豊田（2003）⁽²³⁾が指摘するように、文章データの意味の捉え方によって結果が異なることが懸念される。それに伴い、自由記述の回答を共起ネットワークで示すことは、大量の文章デー

タの頻出語句の抽出やその語句同士の相関関係を自動的に表示することが可能となる。その一方で、データの読み手によって解釈に差異が生じるため、実際に受講生が記入した文章と比較をしながら分析を進めることが必要となる。

4) 分析手順

次に、この分析にあたっては、感想文に含まれる単語の出現回数から、形態素解析から抽出された「名詞」及び「サ変名詞」、「形容動詞」に関する頻出語5語のリストを作成した。さらに、各単語の関係性を構造化するために、共起ネットワーク分析を行う。ここでは、回答者の記述パターンから関連語を自動的に検出し、強く結びついている単語を「サブグラフ検出・媒体」によって、カテゴリごとに色分けした。また、共起ネットワークの設定としては、最少出現数が10以上の単語を選択し、出現数の多い語彙ほど大きい円によって示した。なお、この手順によって検出される図については、「単に語が互いに近くに布置されているというだけでは、それらの語の間に強い共起関係があることを意味しない」⁽²⁴⁾とされている。

5) 倫理的配慮

本稿では、「初等音楽科指導法」の受講生に対して、研究内容と収集されたデータの取り扱いについて説明し、調査対象者の承諾を得た上で実施した。その後、リアクションペーパーの回収については、授業補助者に取りまとめを依頼し、回収・管理を行った。なお、言語データの分析にあたっては、本文中、個人名が特定されないよう、必要に応じて変更を加えた。

5. 本調査の結果

1) 音楽あそびの諸活動を取り入れた実践事例から

本項に関する言語データの内訳として、総抽出語数は31,378、異なり語数は1,821であった。また、文章の単純集計を行った結果、文の数は1,279ケース、段落は201であることが確認された。

まず、表2に示されるように、頻出語句上位には「授業」「音楽」「ゲーム」といった本講義で取り上げた身体表現活動に関する語句が多いことが見て取れる。また、「活動」「実習」といった語句と関連しており、“このような活動を実習などで是非取り入れたいと思った”“自分も実習に行ったら、こういう活動を取り入れて、音楽を親しむきっかけになるような授業にしたいと思った”（太字下線は筆者）など、本講義で取り入れたグループ活動を教育実習に結び付けようとする回答が多くなされていた。

次に、語句同士の関連性を明らかにするために、共起ネットワーク分析を行った（図2）。この傾向としては、

3) 「A教育大学附属小学校」実践の鑑賞から(1)

本項に関する言語データの内訳として、総抽出語数は30,559、異なり語数は1,991であった。また、文章の単純集計を行った結果、文の数は1,266ケース、段落は198であることが確認された。

これまでのように、頻出語句上位を抽出すると、「ダンス」「自分」「授業」といった語句が多く挙げられている。とくに「表現」という語句からは、“今日は音楽の授業でダンスとコミュニケーションを図り、ダンスというのは体の一部ではなく、足を使ったり、顔で表現したり、時には声を出すことで相手に伝えると言う表現方法であることがわかった”“身体的表現や体を動かすことが苦手だったが児童たちに授業を楽しんでもらえるように、活動形式での授業や創作の活動を最大限に取り入れたい”(太字下線は筆者)などの回答がなされた(表4)。

次に、共起ネットワーク分析を行うと、図4に示されるように、「ダンス」「授業」「表現」を中心としながら多岐にわたるカテゴリーに分類された。その中でも、「実習」に関する語句からは、「リズム」「授業」といった語句と関連しており、“9月の本実習で、体育の授業で表現遊び

表4 受講生の回答から抽出された頻出語句(3)

順位	名詞	頻度	サ変名詞	頻度
1	自分	161	ダンス	336
2	音楽	145	授業	207
3	子ども	132	表現	116
4	ゲーム	110	活動	161
5	先生	89	実習	54

順位	形容動詞	頻度
1	苦手	43
2	大切	38
3	必要	27
4	簡単	23
5	得意	20

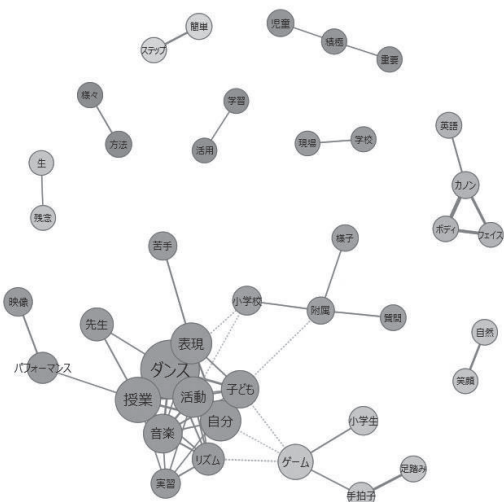


図4 受講生の回答における共起ネットワーク(3)

をするので教科は違うけれど参考になる要素があった。簡単なリズム遊びは年齢差に関係なく楽しめるので、縦割り班での活動でも取り入れたら楽しいと思った”“自分は小学校実習で、5年生の表現運動を担当することになったので、今回の授業内容を盛り込んだ楽しい学習をしたい”(太字下線は筆者)のように、小学校体育科の領域においても取り入れようとする回答がなされている。

4) 「A教育大学附属小学校」実践の鑑賞から(2)

本項に関する言語データの内訳として、総抽出語数は31,419、異なり語数は1,927であった。また、文章の単純集計を行った結果、文の数は1,295ケース、段落は200であることが確認された。

ここでの頻出語句上位については、これまで通り「音楽」「ダンス」「活動」といった語句が上位を占めているものの、「大切」という語句についても多く挙げられている(表5)。その回答例としては、“子どもたちの自由な発想を大切にしなが^ら授業を展開していくことが音楽だけでなく、どの教科においても必要になるのだと感じた”“身体を動かして楽しむ気持ちを教師自身が大切^にしたいと思った”

表5. 受講生の回答から抽出された頻出語句(4)

順位	名詞	頻度	サ変名詞	頻度
1	音楽	355	ダンス	251
2	リズム	208	活動	241
3	子ども	183	授業	220
4	自分	134	附属	143
5	ゲーム	106	表現	141

順位	形容動詞	頻度
1	大切	49
2	様々	37
3	必要	27
4	苦手	23
5	簡単	15

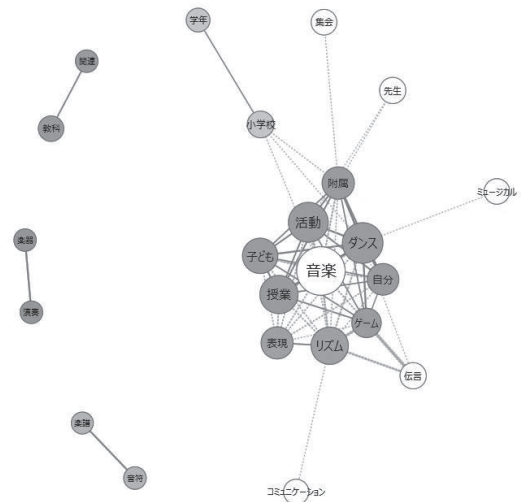


図5 受講生の回答における共起ネットワーク(4)

(太字下線は筆者)などの回答がなされた。

そして、共起ネットワーク分析を行うと、「音楽」という語句を中核としながら、「リズム」「活動」といった語句と関連する傾向が見られ、“今回の授業のような楽器を使わず、体を使ってのリズム遊びや表現活動は、多くの可能性が秘められているように感じた”“リズム遊びは正解でも不正解でも盛り上がれて、コミュニケーションの取れる活動だと思った”(太字下線は筆者)といった記述がなされている(図5)。さらに特筆すべき点は、「教科」「関連」といった語句が関連していることである。それは、“今回のリズム活動と他の教科と関連させながら創作活動と展開することで、表現活動をうまく生かした授業づくりができていたと思いました”“他教科との関連に注目してみても、英語の先生と一緒にやってみたり、体育でのダンス活動として取り組んでみたりと、幅広い活動が行うことができる”(太字下線は筆者)の回答から見られるように、身体表現活動は教科間連携を促すものとして理解していると考えられた。

6. 本稿の成果

本稿では、「初等音楽科指導法」の受講生に身体表現活動を取り入れたアクティブ・ラーニングを経験させることは有効ではないかと考え、本事例の学習成果の検討を行った。以下、本取組で明らかになった成果を整理し、まとめとしたい。

まず、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた身体表現活動は、受講生同士が他者とのかかわりを意識しながら、多様な表現を生み出す機会となった。それは、“リズムのとり方やテンポ、強弱だけではなく、お互いのことを意識できた”“子どもが楽しみながら、リズムやテンポなどを体得するのに、ぴったりだと思った”という回答のように、アクティブ・ラーニングによる音楽指導法に対して、肯定的な意見が多くなされたことから強調できる。したがって、小集団によるグループ活動を効果的に取り入れることは、受講生同士がさまざまな表現方法のアイデアを出し合い、協働的に表現を探求する契機になったと捉えることができる。

また第2節でも述べたように、「初等音楽科指導法」の受講生は音楽指導に苦手意識をもつ学生が少なくない。例えば、“私は楽器が演奏できないことや歌を人前で歌うのが苦手だったので、音楽の授業は好きではありませんでした”などの回答が見られたように、小学校音楽科における授業実践のイメージとしては歌唱、器楽領域に対するものが多く挙げられた。一方、音楽科目に対する苦手意識は受講生のみならず、受講生の音楽指導を受ける児童も直面する課題となる。そうした中で、“歌を歌ったり、楽器を演奏したりするよりも気軽に取り組める単元なので、音楽が苦手だなと思う人でも楽しめるのではな

いかと思った”“歌を歌ったり楽器を演奏したりする音楽の授業は苦手な児童がいたり苦手意識から嫌だと思ってしまう児童がいると思うが、このようにゲーム感覚で参加できる音楽の授業は一体感が出ると思った”のように、身体表現活動による取組は、音楽科目に対して苦手意識を抱く受講生はもとより、歌唱、器楽といった音楽学習を苦手とする児童にとっても、苦手意識を克服する有効な手立てとして支持を受けたものと考えられる。

さらに、“9月の本実習で、体育の授業で表現遊びをするので教科は違うけれど参考になる要素があった”“他教科との関連に注目してみても、英語の先生と一緒にやってみたり、体育でのダンス活動として取り組んでみたりと、幅広い活動が行うことができる”などの回答が挙げられている。このように、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた身体表現活動は、小学校音楽科の授業実践のみならず、体育科や外国語活動といった教科間連携を促すものとして受け止めていた。

こうして見ると、アクティブ・ラーニングを機能させる学習形態を学び取れるように考慮した本講義においては、授業実施者が学習者中心型の学習形態を仕組むことによって、小集団のグループ活動による意見交換から身体表現活動をめぐる多様な気付きをもたらしていた。さらに、“このような活動を実習などで是非取り入れたいと思った”“グループやクラスの仲を深められるアイスブレイクのゲームになるのだと感じた”の回答のように、これまで取り上げた実践事例の数々を受講生自身の教育実習や今後の教育実践に取り入れようとするなど、こういった身体表現活動による取組は、アクティブ・ラーニングの推進に向けた有益な実践例として活用されることが期待できる。

7. 今後の課題

本稿では自由記述のリアクションペーパーを考察する目的として、テキストマイニングによる分析を試みた。しかし、これまで述べたように、自由記述の回答を共起ネットワークで示すことは、そのデータの読み手によって解釈に差異が生じることが課題として挙げられる。さらに、それらの方法によって、受講生のすべての意識を探ることは困難であるため、選択肢型の質問項目を設けるなど、他の分析手法を組み合わせながら検討を進めることが望まれる。この点に関連して、受講生のリアクションペーパーの記述から、本年度においても音楽科目に対する苦手意識をもつ受講生が混在していることが確認された。とくに、受講生のうち9割以上が芸術系分野以外を専門とする学生が占めている実情からも、受講生を専攻コース別に分類し、それぞれの比較検討を行うことが求められよう。

もう一つは、受講生のリアクションペーパーの記述か

ら、「実習」に関する回答が多くなされていた。このうち、これらを教育実習に取り入れようとする回答が多く見られたことから、教育実習以前・以後の追跡調査を行うことが重要となる。しかし、こうした調査の場合においては、自由記述のリアクションペーパー回答のみでは不十分であり、受講生自らが作成した指導案や授業実践の映像記録を組み合わせながら事例検討を進めることが必要となろう。以上の見地に立って、アクティブ・ラーニングによる身体表現活動が受講生の授業実践に還元できるよう、引き続き検討を進めることとしたい。

一 注 一

- 1 本稿における身体表現活動とは、現行の小学校学習指導要領解説（音楽科）における「音楽との一体感を味わい、想像力を働かせて音楽とかかわることができるよう、指導のねらいに即して体を動かす活動を取り入れること」の項目に関わる活動全般を指す。
- 2 中澤利彦氏のダンスワークショップ及び講演会は、平成27年6月に新潟県内のA教育大学附属小学校、A教育大学附属中学校、A教育大学、兵庫県内のB教育大学附属小学校の全4会場で企画、実施を行った。また、両小学校側から「キャリア教育」につながる講演内容を含んで欲しいとの意向を受け、ダンス指導及びダンスを通した生き方についての講演を行った。

一 謝 辞 一

本稿のダンスワークショップの実施にご協力くださいました、上越教育大学附属小・中学校、兵庫教育大学附属小学校の先生方に心より御礼申し上げます。

一 文 献 一

- (1) 文部科学省「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」、2014
- (2) 和井田節子、小泉晋一、田中卓也「教員養成課程におけるディベート学習の教育的効果：思考力と社会的能力に着目して」、『共栄大学研究論集』14, pp.206-209, 2016
- (3) 山崎哲司 他「教員養成教育における教育改善の取組に関する調査研究 ～アクティブ・ラーニングに着目して～」『平成25～26年度 教員養成等の改善に関する調査研究』, pp.49-50, 2015
- (4) 谷村綾子「アクティブラーニング成立要件としての学生の「対他者」視点獲得」、『千里金蘭大学紀要』12, pp.41-42, 2015
- (5) 亀倉正彦「失敗マンドラを活用したアクティブラーニング授業の失敗事例分析とその知識化 - 学生の「やる気」を引き出す観点から -」、『NUCB journal of economics and information science』59 (2), pp.123-125,

- 2015
- (6) 安藤江里『『初等音楽科教育法』における模擬授業の有効性について 一指導案および実践の分析から一』『学校音楽教育研究』18, pp.270-271, 2014
- (7) 谷本直美「初等教員養成における音楽科教育法のカリキュラムデザイン (3): 体育系学生がアウトリーチ活動と模擬授業から音楽の授業構想を学ぶことができるか」『学校音楽教育研究』17, pp.296-297, 2014
- (8) 時得紀子、飯村諭吉「アクティブ・ラーニングを取り入れた音楽指導をめぐる一考察 一初等教員養成における実践事例をもとに一」『THE PROCEEDINGS OF THE SIXTH JAPAN-CHINA TEACHER EDUCATION CONFERENCE NARUTO UNIVERSITY OF EDUCATION 2015』, pp.3-9, 2015
- (9) 上越教育大学「シラバス」
<http://www.juen.ac.jp/070graduate/010syllabus.html>
[最終アクセス 2016年04月05日]
- (10) 上越教育大学「特色ある大学教育プログラム」
<http://www.juen.ac.jp/gp/tokushoku/contents/06/index2.html>
[最終アクセス 2016年04月02日]
- (11) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社, 2008
- (12) E. ジャック＝ダルクローズ、板野平訳『リトミック・芸術と音楽』, 全音楽譜出版社, 1990
- (13) トレジャー・ウィシャート、坪能由紀子・岩尾裕共訳『音あそびするものよっておいで1巻・2巻』, 音楽之友社, 1998
- (14) 永田敬・囃子一雅、『アクティブ・ラーニングのデザイン 東京大学の新しい教養教育』, 東京大学出版会, 2016
- (15) 厚生労働省『大学等におけるキャリア教育実践講習テキスト』, キャリア・コンサルティング協議会, 2013
- (16) 小原光一 他『小学生のおんがく1』, 教育芸術社, pp.8-9, 2016
- (17) 新実徳英 他『小学音楽 おんがくのおくりもの1』, 教育出版, pp.38-39, 2016
- (18) 高橋美恵子『『アクティブ・ラーニング』が機能する条件 一大学授業導入への教育方法学的検討一』『関東学院大学人文学会紀要』133号, pp.94-97, 2015
- (19) 時得紀子、金子謙太郎、飯村諭吉「初等教育における身体表現活動をめぐる一考察：上越及び兵庫教育大学附属小学校の実践から」『上越教育大学研究紀要』35, pp.325-335, 2016
- (20) 樋口耕一, KH Coder Index Page
<http://khc.sourceforge.net/dl.html>
[最終アクセス 2015年10月11日]
- (21) 北村瑞穂「シラバスにおける授業目的と成績評価方法の変化：テキストマイニングを用いた探索的研究」『四

條畷学園短期大学紀要』49, pp.61-66, 2016

- (22) 越中康治 他「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析：共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み」, 『宮城教育大学情報処理センター研究紀要：COMMUE』22, pp.69-73, 2015
- (23) 豊田裕貴「テキストマイニングによるドキュメントデータの分析（＜特集＞情報の分析・解析法）」, 『情報の科学と技術』53（1）, pp.23-24, 2003
- (24) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－』ナカニシヤ版, 2014

－付 記－

本稿は、科学研究費補助金 基盤研究（C）（課題番号：25381176, 研究代表者：時得紀子）及び、兵庫教育大学連合大学院共同研究プロジェクトQ「芸術表現教育におけるコンピテンシー育成のためのプログラム開発に関する研究」（プロジェクトリーダー：時得紀子）における、調査研究の一環をなすものである。

